

## 特別セクション

# ガンディーの経済思想を再考するーエコロジーと脱成長ー

## イントロダクション

中野 佳裕

筆者が2014年度春学期に国際基督教大学で担当した開発学入門コースでは、南北問題とグローバリゼーションの歴史的展開を、それらの背景にある近代文明の思想的基盤を解き明かしながら検討してきた。第二次世界大戦後の国際開発体制の樹立と共に〈開発〉(development)という思想は世界化し、以後、この言葉の意味内容と主体を巡って南側諸国と北側諸国の間で様々な論争が展開されるにいたっている。この講義では、開発学を政策科学の一環として位置づける主流派アプローチとは一線を画し、国際開発体制と共に形成されてきた現代世界の歴史的構造を再検討する「批判的アプローチ」の立場から国際開発の歴史を学ぶことにしている。つまり、〈開発〉を何よりも文明の問題と捉え、その問題の核心を思想史とグローバルな政治経済史の双方から解きほぐすことで、私たちが生きる現在という歴史的地点が抱える様々な課題を洗い出していくというアプローチである。

このような視座で講義を進めていく中、2014年5月1日(木)には、香川大学の石井一也教授を招いて「ガンディー思想の現代的意義：コンヴィヴィアリティを軸として」という演題の公開授業を行った。なぜガンディーの思想を取り上げたかといえば、国際開発の歴史を検討する際に、彼の思想は主に二つの文脈で重要な参照点となるからだ。一つ目は、反植民地主義運動の指導者としてのガンディーである。南アフリカ共和国滞在中に著した『真の独立への道(ヒンドゥ・スワラージ)』において徹底した近代文明批判を行ったガンディーは、以後、非暴力・不服従の反植民地主義運動を南アフリカと母国インドで展開するようになる。彼の反植民地主義運動は、1947年にインドを独立へと導いた。独立後のインドは、彼の政治運動の後継者であったジャワハルラル・ネルーを首相に置くことで国家主導型の経済発展の道を目指し、同時期に脱植民地化したアジア・アフリカ諸国と共に、第三世界の自立を目指す「非同盟

運動」(Non-Aligned Movement)を展開するにいたる。国際開発の歴史を振り返ったとき、反植民地主義運動家としてのガンディーは、ポストコロニアリズムや第三世界主義の背景を構成する重要な思想的水脈として、常に参照されるべき存在である。

もう一つは、既に上でも触れたことであるが、近代文明批判の文脈においてである。ガンディーは、反植民地主義運動と並行して、生産力至上主義の経済発展モデルを問い直す独自の思想を発達させたことでも知られている。19世紀英国のウィリアム・モリスがそうであったように、ガンディーは、機械文明の均整の欠いた発達が人間の労働の価値を下げ、人間を資本主義経済の歯車に貶める危険があることを糾弾した。利潤最大化を至上命題とする資本主義経済体制は、生産性の向上のために人間労働の大部分を機械技術に代替させる。しかしガンディーは、そのような効率重視の生産活動が、生産の現場から人間らしさを奪うだけでなく、貧困層の雇用機会と生存権を剥奪することも十分に理解していた。だからこそ彼は、生産性は低いが多くての貧困層に労働機会と生産手段を与えるチャルカーを使用したカーディーの生産を推進した。

また、ガンディーは、自身も敬愛するトルストイと同じように倫理的生活を重視し、「簡素な生活(シンプル・リビング)」を実践した。彼は、ヒन्दウー教、ジャイナ教、仏教、キリスト教などの宗教倫理を学びながら、「アヒンサー」(不殺生、非暴力、不服従)、「ブラフマーチャリヤ」(純潔)、「アパリグラハ」(不所有)などの独自の倫理を提唱した。これらの倫理を経済活動のまさにその中で実践することで、資本家による労働力の搾取や富の独占を生み出す「剥き出しの資本主義」を、分かち合いの原理に基づく経済へと転換することを構想した。彼の提案した受託者制度理論はその代表的な事例である。

そして彼は、独立後のインドに、西洋の産業社会モデルを模倣することなく、自国の歴史と土着の文化に根ざした成熟の道を辿ることを期待した。ダグラス・ラミスの最近の研究で明らかにされているように、彼は、国内に存在する70万の村落共同体が経済と政治の自治を享受する、協同組合的な村落連邦国家を展望し、その実現のための独自の憲法案を作成していた<sup>(1)</sup>。

歴史の現実には、ガンディーの近代文明批判が独立後のインドで受け入れられなかったことを物語っている。彼は、インドが自立の道を歩み始めようとするまさにその出発の時に暗殺され、インドの指導者となったネルーは、師の意志を受け継ぐことなく、国家主導型の経済開発と近代化の道を選んだ。そして今日インドは、中国と並ぶ

新しい消費社会を形成し、世界経済の舞台に台頭してきている。

しかし、ガンディーの近代文明批判は、彼の死と共に歴史の遺物となってしまったのかといえば、決してそうではない。彼の死後数十年が経過した現在、現代文明が抱える様々な矛盾を問い直す議論において、ガンディーの思想は重要な参照点であり続けている。かつてマルクスは『共産党宣言』（1848年）の冒頭で「ヨーロッパに亡霊が徘徊している、コミュニズムの亡霊が」と語りかけているが、同様に、生産力至上主義の経済発展モデルが地球全体を覆い尽くそうとする現代において、ガンディーの亡霊はわたしたちの日常に幾度となく再帰し、現代文明を基礎付ける社会的想念（l'institution imaginaire sociale）を屈曲させる光を彼岸から与えている。

この特別セクションでは、ガンディーが提出した「簡素な生活」というオルタナティブな理想社会像を、現代文明が抱える生存の危機を克服するための積極的な展望として検討している。最初に収録した論文は、5月1日に行われた石井一也氏の講演原稿の加筆修正版である。続く中野佳裕の論文では、石井氏の『身の丈の経済論』を社会哲学の現代的主題を参照にしながら検討している。この特別セクションが、ガンディー思想の創造的な再評価のための一助となることを期待したい。

---

(1) ダグラス・ラミス、『ガンジーの危険な平和憲法案』、集英社新書、2009年。

